

OMNIA VINCIMVS FRVCTV INTER FOLIVM VERO!

ISSN 2759-5404

もっと源流へ、
もっと本質へ！

哲学文化塾機関誌「フィロカルチャー」略して改め

フィロカル

12号
Summer
2024

①特集 インチキ万歳！ 輝けるプソイドロジー

ホンモノ・ニセモノ・バツタモノ

& クセモノ・パチモノ・マガイモノ・トンデモノ・クワセモノ



©OKAMOTO Mitsuhiro

岡本光博 今道友昭 佐藤二葉 ヤナギダ・カツミ たぬ屋 凜賢 みむらりえ 茅野友子 伊藤博章

VOL. XII

哲学文化塾
utiles sophiamque cano non arma uirmque



⑧特集 インチキ万歳！ 輝けるブソイドノロジー ホンモノ・ニセモノ・バッタモン

監 クセモノ・バザモノ・マガイモノ・トンチモノ・クワセモノ 編集部・演賢

03 Contents

* ニセモノの心理学 今道友昭 08

* 新・世界の名著 ④ 偽ディオニュシウス・アレオバギタ文書 hamacken 10

* 佐藤二葉のギリシア悲劇の声を探して ⑤ ソポクレース『アイアース』
「心狂わす病の嵐」 佐藤二葉 11

* ムネーモシュネーの会と雑誌『ムネーモシュネー』 ⑥ 詩人水原昇 前編 みむらりえ 14

* 時のエッセイ ⑦ 一瞬と一生、そして永遠の時 茅野友子 18

* 行間読んで、進んだ先に たぬ屋 21

* 第 ⑧ 回 講座アワーハウス ファームウェアー
私が、古いコンピューターをぞんざいに扱わない理由 ヤナギ・ダカツミ 24

* 第 ⑩ 回 「わが哲学を語る」を語り継ぐために 偽物——その名に値しないもの 伊藤博章 26

* 第 ⑫ 回 美は輝きた インチキにかこつけて 演賢 27

★ フィロカル (誌名) 語義講釈:「フィロ-」はギリシャ語の「フィロー (愛する、好む)」,「-カル」はカタカナ日本語「カルチャー」の略。造語的にはフィロソフィー (賢さを好む) やフィロロジ (言葉を好む) のように、ギリシャ語由来の語同士 (同じ言語同士) を組み合わせるのが筋である。culture はラテン語 colo (耕す, 手入れする, 飾る, 尊重する) の受動の完了分詞 cultus (耕された, 手入れされた, 洗練された, 上品な) 由来の言葉。したがって、フィロカルチャー略してフィロカル (洗練されたものを好む) はギリシャ語とラテン語という異なる言語の組み合わせなので、少々インチキでもある。語学的、形式的造語視点から大雑把に言えば、フィロ + 目的語が建前で、目的語が母音または h から始まる場合に限り、フィル + 目的語となる。例えば、philanthropy (フィランスロピー (博愛, 人好き)), philharmony (フィルハーモニー (交響楽団, 和音好き)), philhellene (フィルヘレネー (ギリシャ好き)) など。要するに、母音の連続や子音続きという不細工さを回避している。これが「フィルソフィー」や「フィルカルチャー」とはならない理由である。ということで今後とも『フィロカル』をよろしくお願い申し上げる次第である。

レ『UFO』
など、パロディと社会的問題提起を絶妙にブレンドした作風で知られる。一部の作品はアップ・デートされ、増殖中であることも特徴といえる。



©OKAMOTO Mitsuhiro

★表紙イメージ:『バッタもん』(岡本光博作) 神戸ファッション美術館の展覧会(二〇一〇年)では、ルイ・ヴィトン社のクレームで会期中に撤去された。下記参考エッセーには「展示は『公序良俗に反している』というブランド側の訴えが正当ならば、『公序良俗』とは一企業の利権と同義、ということになる」とあり、そのとおりかもしれないが、ここでいう公序良俗違反とは登録商標の無断使用(デザインを素材として使った)なので許そう。それよりも即日撤去した公立美術館の対応、有無を言わせぬ電光石火の超速決断力が微妙だ。美術や企画に関心が薄いお偉方のブランド・パワーへの付度か? 何にせよ、ピンボケ感!! 大人の事情感是否めないし、この世からバッタもんが消えることはない。
美術家、岡本光博氏は『ドザえもん』『DADAモ

◎特集 インチキ万歳!

輝けるプソイドノロジー

オニモノ・ニハモノ・バツタモノ

& クセモノ・パチモノ・マガイモノ・トンデモノ・クワセモノ

編集部・濱賢

退屈な序

理由は語義講釈だからである。プソイドノロジーとは、今道友信氏提唱のカロノロジーをモジったインチキ造語である。

退屈さにさらに輪を掛けるようで申し訳ないが、そのモジられた側のカロノロジーの語義復習から始めたい。復習しても当然ながら利得など特に期待できないが、プソイドノロジーを理解するために(こちらの理解もまた益なしだが)、何にせよカロノロジーの成り立ちを今一度確認されたいというところなのである!

手っ取り早く、カロノロジー会のパンフから抜粋する(樋笠勝士氏によるモダンな解説、下段コラム参照)。パンフにはラテン語(權威的死語)っぽくカロノロジーとあるが今日の言葉(英語)

ではカロノロジーである。

プソイドノロジー/Pseudonology

プソイドノロジーも4要素からなる。プソイド+オン+ノース+ロゴスである。オン以下はカロノロジーと同じなので(「存在」オン)を超えた「美」カロン(今道流古典派、あるいは「美」カロン)の「存在そのものの性」オン(樋笠流モダン派)を「知性・理性」ノースで捉えようとする「論理・学問」ロゴス、プソイドについてお話ししたい。

英語風に読めばスードノロジーだが、Pを無視するのは英語特有の悪いクセ(し)なので(サイコロロジーも同じ。正しくはプシコロロジー。サイケデリックも。共にギリシャ語プシュテーケー「心・気持ち・虫のチョウ」の系列)、ドイツ語風にプソイ

※ Calonologia (カロノシア/カロノギア)

今道友信が提案した新たな学問「カロノノギア」はギリシャ語をラテン語に音訳した合成語である。四つの語によって構成された学問の意味は、その名前に見れている。「カロン」とは「美」を意味し、「オン」は「存在」あるいは「真実在」を意味する。さらに「ノース」は、古典哲学では超越者を観照する至高の精神の能力、すなわち「知性」を意味する。末尾の「logos」が、学問名称のための接尾辞であり、「学・論理・理性」を意味するロゴスに由来することで、全体として、カロノノギアと呼ばれる学問は、美の真実在性について、あるいは美と存在をめぐる知性の活動についての学問を表していることが分かる。こうして、カロノノギアとは、知性の相関者としての存在や美を考究する学ということになる。これは、歴史的に見れば形而上学や神学が担ってきた学であり、また古代ギリシャ哲学と西欧キリスト教中世哲学が占有してきた学である。この学を今道は芸術美に対する「思索」として提案したのである。

(カロノロジー会パンフレットより抜粋)

ドとした。ドイツ語なら語尾はロギー (logie) だが、無国籍インチキ造語にするため混在させた次第である。響きも悪くない。元の語はギリシャ語プセウドス (pseudos) の仲間、動詞プセウドー、形容詞プセウデースで、嘘、偽り、ニセモノ、捏造などを意味する。中にはプラトン由来の「気高き嘘 (noble lie)」↓「嘘も方便」といった大人の用例もある。

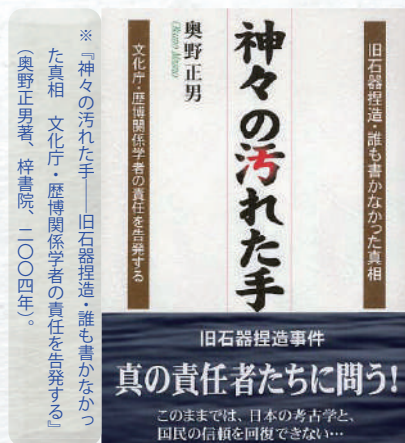
以上から、カロノロジー同様に定義すれば、プソイドノロジーとは超越するインチキ (存在を超えたインチキ、またはインチキの真存在性) を知性で捉えよう、あるいは直観的理性で感じ取ろうとする学問となる。

大雑把にして乱暴だが、これにて退屈な序を終え、以下、実例を見ていこう。

悪いヤツはどいつだ、出たいー！

【藤村新一 (ふじむら・しんいち)】

ゴッド・ハンドがココ掘れワンワンすれば、必ずほぼ大当たりで石器が現れる。マスゴミは小躍りして大発見報道を伝え、考古学の権威は太鼓判を押し、権威に弱い世の中は真に受けた。毎日新聞が石器を地中に埋め込む下準備作業中のゴッド・ハンドを写真付きで報じるまでは。「魔が差した」にしては、一六二箇所の遺跡での捏造は魔が差しすぎだが、ゴッド・ハンドを仕立て上げ、美味しい思いをした面々は上手く逃げ切ったようだ。



怪しいと思っけていても勝ち馬に乗っかり、いざとなれば、自分はまだまされた被害者側にシフトすればよし。と下準備万端、備えあれば憂いなし状態だったのではなからうか。考古学界がおおむね腐り切っていることは実証された。信頼回復というが、回復とは以前あったものについての言葉なので、これは疑問だ。

【小保方晴子 (おぼかた・はるこ)】

こちらも世紀の大発見、フィーバー、フィーバーのお祭り騒ぎではあったが、この際、STAP細胞の有無はどうでもよく、氏の博士論文に多数の問題点と数か所の故意の不正があり、と事後の再調査で明らかになったこと。つまり研究・論文指導、審査、学位授与のプロセスがインチキ極まりなかったことを大問題としたい。



真つ当な人間が冷静にチェックし、指導していれば、犠牲を出さずに済んだかもしれない。他人が書いた論文チェックが面倒なのは分かるが。この類いの大問題はいまだ野放しのようなのだ。参考図書として『捏造の科学者 STAP細胞事件』(須田桃子、文藝春秋、二〇一五年。第46回大宅壮一ノンフィクション賞受賞作) を挙げるのが筋だが、ジャケットに引かれ、別物にした。疑問点として、守護霊にインタビューし、出版した場合の印税はどうなるのが気になるところである。そんなとき、信仰を捨て、リアルな世界へ逃げ込めば、法的に守護霊は認め難いため、本対話編は創作系著作としてカテゴライズされるであろう (守護霊は架空対話に登場するキャラ)。ドラエモンやアンパンマンに印税が払えないのと同じ扱いである。

斬新すぎた新手法！

【深井智朗（ふかい・ともあき）】

捏造、バクリは世の常、日常茶飯事として、不正インチキ學術研究史に登場した新手法を紹介しておく。

『ヴァイマルの聖なる政治的精神』。総じてずさんなインチキ論考であることはおくとして、特筆すべき新手法とは、架空の神学者カー・レーフラーの論文「今日の神学にとつてのニーチエ」（もちろんそんなものは存在しない）を引用し、論を進めるという手の込んだ手法である。これほど創作能力に長け、手間暇を惜しまないなら、小説としてリメイクすれば、「單なる小説を超えた思想、もはや第一級の政治哲学



※『ヴァイマルの聖なる政治的精神——ドイツ・ナショナリズムとプロテスタンティズム』（深井智朗著、岩波書店、二〇二二年）

書だ」などとヨイショされたかもしれない。先の二例とは異なり、ほぼほぼ罪人は著者である。

が、しかし、版元、何やってんだ！ と言えなくもない。編集も校閲もどうだったのかは分からぬが、心ある編集者や校閲担当なら、簡単にでもチェックと指摘はするはずだ。ただ、著者が聞く耳を持たない頑固者だと（指摘の仕方でも大事）、どうしようもない場合もあるのは事実。雇われ社員編集者の場合、出版を優先しなければならぬ事情もあるので「まれに読まれても、恥かくのは著者」と周りの同意を得つつ、下版することも少なくはない（自分はそうだった）。

版元のホームページでは謹告として「……同報告書の判断を重く受けとめ、著者深井氏に連絡のうえで、本書を絶版とすることといたしました」という他人事（とこと）が貫かれている（<https://www.iwanami.co.jp/book/b261286.html>）。

自分なら「インチキ研究史に現れた新手法！」とでも帯を付けて文庫化したいと思う。インチキならぬ編集注と解説を新たに加え。

この出版社は音楽書でもバクリが指摘されているが、さて、どうなることやら。内容をチェックできる編集者（ギリシャ哲学書にはギリシャ語が分かる者、音楽書なら楽の理屈が分かる者）を担当にすれば、著者によつては煙たがることもあるが、多少は不正も思い違いも減るだろう。

別著作『プロテスタンティズム』（中公新書二〇一七年）は、読売・吉野作造賞を受賞したが、取り消された。不正は確認されなかったらしい

が、ならば何を評価したのやら。

強行！

【竹中平蔵（たけなか・へいぞう）】

著書『研究開発と設備投資の経済学』は、サントリー学芸賞（一九八四年）を受賞したエコノミストとしての出世作である。個人的にこの分野には全く関心がないが、高校の大先輩だからとこじつけて取り上げさせていただいた。

鈴木和志氏（現在、明治大学教授）との共同研究を竹中氏が鈴木氏の意向を顧みず、個人の研究成果として強行発表した。というアメリカ留学時後の若気の至り、では済まされそうもない金字塔。※ダケ主義のグローバリズムは今も香ばしく、サステナブルにくすぶり続けている。



※『研究開発と設備投資の経済学——経済活力を支えるメカニズム——』（竹中平蔵著、東洋経済新報社、一九八四年）。

ザ・ブランディング

【佐村河内守(さむらこうち・まもる)】

セルフプロデュースの達人である。雑誌の表紙が全てを物語る。バックナンバー販売中。

氏の全盛時に異を唱えた音楽家・学者がいたが、いかがわしさを感じつつも、やはりここは勝つ馬に乗って、いざその時が来れば、だまされた被害者面をすれば何とかなるさと世渡り上手な業界の大人たちは考えたのかもしれない。ルッキズム隆盛の世にあつて、見た目は大切だが、武満ファンの自分としては、ビジュアルとストーリー先行型のアーティストは生理的に苦手である。これも見た目判断にすぎないが。



※『CHOPIN』佐村河内守、ソン・ヨルムのスぺシャル・インタビューあり(株式会社ハナナ、二〇一三年一月号)。

【川上伸一郎(かわかみ・しんいちろう)】

またの名をシヨーンK(シヨーン・マクアードル川上)という。話術、声質、英語運用力、雰囲気、どれも魅力的で人を引き付けるには十分過ぎた。加えて、まぶし過ぎる学歴、経歴、地位と肩書、おまけにあのルックス。どこからどう見ても完全無敵である。

著書『MBA講義生中継経営戦略』(TAC出版、二〇〇七年)には「シヨーン・マクアードル川上 ブラッドストーン・マネジメント・イニシアティブ・リミテッド代表取締役、マネジングパートナー。大手コンサルティング・ファーム、投信投資顧問会社を経て、95年に経営コンサルティングとして独立。専門はコーポレート・デベロプメント(全社戦略開発、新規事業開発支援。現在、ニューヨーク、パリ、東京など6ヶ国7都市を拠点に、日系、外資系企業の様々な事業領域における戦略コンサルティング業務、投資ファンド運営事業、地方自治体、各国政府・行政団体へのアドバイザリー・サービスにも従事。その他、ベンチャー育成・創業支援、ビジネス・リーダーのためのスキル開発トレーニングも行う。また経済・ビジネス番組を中心にテレビ、ラジオのパーソナリティ、コメンテーター、パネラーとしても活動。現在、FMラジオ局J-WAVE「大和証券MAKE IT 21(毎週土曜22時)のナビゲーターを務めている」とあり、ハーバード大学でMBA取得、パリ第一大学に留学とくれば、それはもう……。ラジオ・パーソナリティ以外は実のところよく分からないが、何だかスゴそう

な感じは否めない。

余談①として、ホラッチョ川上というあだ名があったとか。ホラッチョといえば、ハムレットの親友ホレーシオ、ローマ最高の詩人ホラティウス、ともに言葉と教養の達人である。であるが、ここでは法螺(ほら)ちよ(接尾辞)であろう。法はタルマ、螺はシャンカ(螺貝)。説法は巧みな話術で広く人々の心に響き渡つたのは事実。

余談②として、著名人が、ライターの下書きに手を入れるようなケースも含め、名義貸しで出版することは珍しくない。ゴースト経験は自分にもある。出版慣れしたプロっぽい著者に多いのも事実で、逆に、アマチャっぽい著者は自分で書きたがるこだわり傾向が強いような、性格によるような。違和感なく、完成度が高ければ、そしてその人らしいものができれば、過程はどうでも構わない。さて、②はどうだろうか。



※『自分力』を鍛える(シヨーンK著、あさ出版、二〇〇八年)。

【小池百合子（こいけ・ゆりこ）】

学歴詐称、カイロ大学とにぎやかに、選挙の訪れを告げるのは必ずこの話題である。学歴など、どうであれ、小池氏の能力や実績が変わるわけでもなく、選挙は、建前としてこれから選ぶものである。学歴好きの世間に訴える政治利用なのかもしれないが、ツッコミを入れるなら、政策や実績にすべきではないか。

首席卒業は嘘だとしても卒業は認めよう。

すると卒業のプロセスがおかしいとか。学力が、アラビヤ語能力が、単位がどうかのとか。しかしそれは、卒業するとはかくあるべしという和風で画一的な先人観からのいちゃもんではないだろうか。時代はもうクラウドにしてグローバル？ どのような策を講じようとも卒業は卒業であり、中身は軽かろうが、証書は重い。人生いろいろなのである。



※『女帝 小池百合子』（石井妙子著、文藝春秋、二〇二〇年、文庫版二〇二三年）。

トンデモ本の皇帝

【副島隆彦（そえじま・たかひこ）】

と学会主催の日本トンデモ本大賞、中でも栄えある二〇周年記念のベスト・オブ・ベストに輝いたのが『人類の月面着陸は無かったらう論』だ。まさしく、トンデモ本の皇帝、いわばアウグストゥス・トンデモボヌスである。もちろん各年度の受賞作はいずれ劣らぬ第一級のやんごとなきトンデモ本である。しかし皇帝については、主催側が『と学会レポート 人類の月面着陸はあったんだ論』（山本弘ほか共著、楽工社、二〇〇五年）を出版したほどの高評価だった。

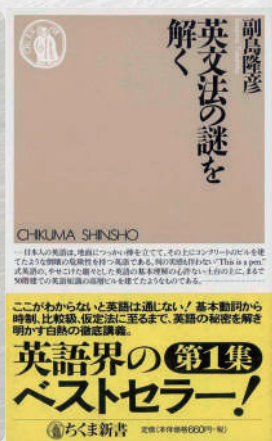
著者の副島氏は博学・碩学で知られ、おまけに雑学でもあり、予備校英語講師の経験もある。お勉強英語社界に一石を投じた『欠陥英和辞典



※『人類の月面着陸は無かったらう論』（副島隆彦著、徳間書店、二〇〇四年）。

の研究（別冊宝島）』（JICC出版局、一九八九年）、を忘れてはいけない。ガチの英語学者、渡部昇一氏と繰り広げた Good morning 論争は（面白過ぎるので）一読に値する（英文法を撫でる）渡部昇一、P H P 新書、一九九六年も参照）。

副島氏は、大胆な仮説構築や制度やシステムのバグを的確に指摘することに長けており、例えば、理系文系の区分、文学部哲学科や人文科学という意味不明なものを当たり前に受け入れている日本の大学制度に対する煙たがられそうな批判など、どちらかといえばインテリ型思索屋である。裏を返せば、Good morning 論や月面着陸のようなマニアックでニッチな事実、理論の集積と検証を経て出来上がっている専門分野では迷走するが（けれどその理にかなった迷走が面白い）、迷走が生きる政治論評は輝いている（『新版 決然たる政治学への道』P H P 研究所、二〇一〇年参照）。



※『英文法の謎を解く』（続編、完結編を含め、全三巻、副島隆彦著、筑摩書房、一九九二・一九九七・一九九八年）。

ニセモノの心理学

今道友昭（ニューヨーク市立大学）

ニセモノと言えば、いろいろ思い付くが、今回は日常生活環境の物から入っていききたい。

日常環境はニセモノだらけ。

何が本物かニセモノかは区別しにくい。素材や原料は本物や天然に見えても、案外、人工的な合成物質でニセモノであることも多い。

場合によっては、本物だろうが、ニセモノだろうが気にならない。しかも、必ずしも本物はニセモノより優れているとも言えない。

特にスポーツウェアでは、合成物質の素材は値段を下げるよりも機能性は上げるためと思える。軽い、丈夫、通気性良く、乾きが早いイメージがある。

必ずしも本物はニセモノより優れているとも言えないのは、ブランド品に關してもそう思うことがある。もちろん、ブランド品のつもりで購入した高額商品がニセモノだったら、それは良くない。一種の詐欺だ。

それでは何でブランド品に高い対価を支払う

のか？

特に本物とニセモノとの見分けが付きにくく、品質も機能も大して変わらない場合、ブランドも一種の詐欺？ 必要以上に人からお金を巻き上げている？ 広告やマーケティングで人をだましている？

それは気持ちの問題かもしれない。物はアイデンティティーに関わることもある。持ち物は自分を反映していると思ってしまう。本物を持てば、自分も本物。価値のある物も持てば、自分にも価値があると思ってしまう。

価値があるから値段が高いのではなく、値段が高いから価値がある。第一、安ければ、高級ブランドとは言えない。皆に手が届かないからこそ持っているとうれしい。

場合によっては、自分だけが所有していないのは面白くないから、無理してまで手に入れようとする。

場合によっては、ニセモノを買うかとも考えるが、ニセモノや安物にはそれなりの不安もある。

人は値段が高い方が優れたものだと思う。そして値段が安いと、なぜ安いのかと怪しむこともある。高い物を買ったからには、それなりの価値があると思いたい。誰もが自分が間違ったことや馬鹿なことをしたとは思いたくない、思われたくない。だから自分の行動（買った物）を正当化しようとする。心理学の専門用語では認知的不協和（Cognitive Dissonance）といい、様々な興味深い実験や症例もある。

デザイン、素材、作り方、機能性、安全性（怪我や健康被害のリスクが低い）、持続、最近では環境的、社会的考慮も含まれる。すなわちブランドから得られる保証と信頼性。

ブランドだからこそ安心できる。安いものはそれなりの訳あり…安い素材、安い作り、すぐ壊れるなどの偏見がある。実際にそのようなこ

ともあるが、必ずしもそうではない。

結局、多くの商品に関する感想は必ずしも実感したものではなく、思い込みの場合が多い。周りに誰が使用しているかによってイメージが作られ、影響を受ける。いわゆるインフルエンスのこともある。企業はそれを利用して広告に投資する。場合によっては商品そのもののよりもののイメージに投資する。

良いイメージを連想させれば、商品もよく見える。行動主義心理 (Behaviorism) では、連想学習 (Associative Learning) として定着してマーケティングでも広く応用されている。

私もたまにされたことがある。ランニングが趣味な私はある店で靴を勧められた。その靴はナイキだった。ナイキは信頼性のあるブランドだと思った。周りには愛用しているランナーも多く、よく目に付くブランドだ。

無意識にナイキの着用している様々な凄いスポーツ選手のイメージが横切っていたのかもしれない。もちろん凄いスポーツ選手は何を着用しても凄いし、速くない人は何を着用しても速くないが、無意識はそこまで考えない。そこまで考えないが、判断には影響する。

その靴はただのナイキではなかった。新作のナイキ 360。靴底の全てがエア (Air)。それまでのナイキは一部しかエアではなかったが、今回はすべてエア！ これぞナイキの頂点。そのためか、それなりの強気の値段設定。そして私にはそれなりの期待と希望的観測 (Wishful Think

ing) があった。

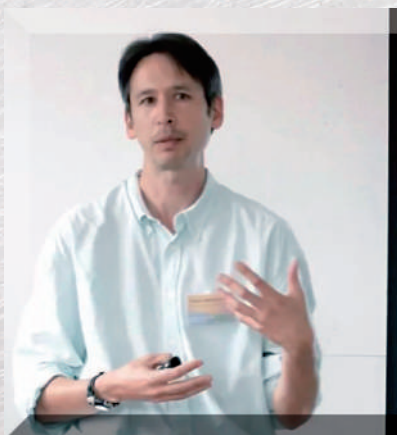
今考えると「空気」を売り物にするのはなかなかのものだ。エアクッションにはエアが入っているから軽い、そしてクッションは脚に良い。そこでの神話 (Myth) は、まずエアクッションに入っているのはエアではなく、二〇〇六年までは SF6 (六フッ化硫黄) である。空気より

漏れにくい、かなりの温室効果ガスである (二酸化炭素の二万二千八〇〇倍、かつ大気中の寿命が長い)。それ以降は N (窒素) に切り替わった。皮肉なことに、私の履いていたその靴はガス漏れを起こし、パンクしてしまった。今までの靴で一番値段が高く、寿命が一番短かった。

もう一つの神話は、クッションは必ずしも脚に良いとは限らない。逆にクッションが多いほど脚の怪我が多いという統計もある。因果関係は不明であるが、クッションが多ければ逆に脚への負担が増える走り方になるという実験結果もある。そのことはマクドゥーガル著 *BORN TO RUN* (「走るために生まれた」) によって広く紹介され、一時クッションが少ない靴も流行し、それまでクッションにこだわっていたナイキもクッションの無いナイキフリーを売り出した。そこでもクッションが無いのを売りにしての強気の値段設定。今ではクッションどころか、厚底が流行している。それはクッションで底が厚くなった靴よりも底が厚い。

ロゴが無ければ、厚底の靴のブランドの区別は付きにくい。それほど違いはないかもしれない

という説もある。実際に欧米や日本の異なる会社が、中国やベトナムの同じ製造ラインと労働者を使っている話もあり、材料も製造プロセスも大して変わらない。ドイツや日本製の靴が良いと思っても、実はメイド・イン・チャイナである。(いまみちともあき 環境心理学)



今道友昭 (いまみち・ともあき)

ニューヨーク市立大学のラガーディア・コミュニティ・カレッジと大学院の心理学准教授。ニューヨーク市立大学大学院で環境心理学の博士号を取得。批判心理学、環境と健康と社会正義と持続可能性の関わり、日常生活環境の現象学的アプローチと存在様式などが興味分野。ニューヨークマラソンを2時間58分で完走。

https://lagcc-cuny.digication.com/tomo_imamichi/Welcome/

新・世界の名著 ④

群

文・hamaken

●偽ディオニシウス・アレオバギタ文書

文春砲がなかったからというわけではないが、一千年以上にわたり、ホンモノとして西洋思想（の分野）に絶大な影響を与え続け、いや、嘘がバレた今日においても高い評価（思想的に価値があるという意味で、現代において科学的に正しいわけではない）は変わらない著作群がある。『天位階論』『教会位階論』『神名論』『神秘神学』と二〇通の書簡からなるディオニシウス・アレオバギタ文書（略してD文書）である。その他、タイトルのみ言及される『象徴神学』と『神学綱要』は現存しないが、そもそも存在しなかった説もある。

著者（五、六世紀）は、パウロ（一世紀）の教説で改心↓受洗したアテナイのアレオバゴス評議員ディオニシオスの名を語り、つまり権威ある教会第一世代の聖職者を装い、まんまとキリスト教世間を欺き続けることに成功した。

ただ偽るだけなら、時代を問わず、話題になることもないが、少なからずの社会的功績や影響力（濃厚な内容があれば、なかなか放つて

おいてはもらえない。D文書の功績、影響力は新プラトン主義の積極的延命とキリスト教思想の理論武装である。

プラトン由来の新プラトン主義は、アカデメイア（前四世紀にプラトンが作った学園。地名がそのまま学園名で、昨今の意識高い系が好むアカデミックという俗物的な胡散臭い響きはない）の閉鎖（五二九年）で公式には終了した。とほぼ同時にD文書が現れ、時代にそぐわなくなったギリシャ思想を勢い付くキリスト教思想へちゃっかり混入させたらしい。ブレンド具合は絶妙だ。

混入させられた側にしても、信仰の思弁的な強化、体系化に役立ち、つまり深淵にして極めてカッコよくそれらしくなったわけで、しかもあのアテネのディオニシオスの著作とくれば、ありがたがきこと、このうえない（この信仰も古いほど偉い）。

しかし、一五世紀に、嘘はバレた。

M・ルターはアレはキリスト教文書などではなく、ぜんぜん新プラトン主義の思想だから信仰には向かないと見抜き、ロレンツォ・ヴァッラはこの権威あるD文書が偽書であることをことをほぼほぼ証明した。L・ヴァッラは文献学



的証明に突き抜け、『コンスタンティヌスの寄進状』が偽書であることやウルガータ（当時の聖書の大権威版）の誤謬を指摘するなど、権威の偽りを暴く、科学的正しさを追求した世に波風を立てせる研究者だったようだ。教会に限らず、今日でも大権威がシロと言えば、真っ黒でもシロなのが沈黙を伴う実情だと思われるが……。

それはそもそも新プラトン主義のD文書、出発点のプロティノスの著作『エンネアデス』からしてキテレツでぶっ飛んだ文面だが、その極みのようなD文書は、オカルトチックにして神秘的、文面と内容は一見に値する。

できればチラ見していただき、リデ（ドル）スコット（字の細かい大型の辞書）をもつてしても全く太刀打ちできない奇怪な語句のオンパレードにしびれ、主観的思弁に悶絶して欲しい。

佐藤二葉のギリシア悲劇の声を探して

5

「心狂わす病の嵐」

ソポクレース『アイアース』

『身体はトラウマを記録する——脳・心・体のつながりと回復のための手法』（ベッセル・ヴァン・デア・コーク著、柴田裕之訳、紀伊國屋書店）という本がある。トラウマ研究の第一人者による世界的に評価が高い書籍ということで、数年前に興味を持って手に取り、様々な側面から感銘を受けた。深く傷つき、不可逆に人生を変えられてしまった人間の、回復しようという心身の働きと、それを手助けしようとする専門家たち——これは医師に限らず、訓練を受けた芸術家たちなども含まれる——の営みに心打たれた。とりわけ、第五部「回復へのさまざまな道」で描かれる、音楽やダンス、そして演劇を用いた療法の報告のくだりが深く胸に染み入った。起こってしまった「過去」を今の時点で身体的に再体験し、安心できる環境でその過去を作り直し、疑似体験し、新しい記憶を生み出す……と

言ったまさに演劇的な療法やダンスや音楽を通じて、自分の体を自分自身が支配しているという感覚や「今」の感覚、自己感覚や自己同一性感覚を取り戻していくといったプロセスに、「芸術」と私たちが呼んでいるものの途方もない力を感じた。

この本の前半では、トラウマを負った様々な人々の症例が報告される。

親友が目の前で惨たらしく殺され、逆上して罪のない人々を虐殺してしまったヴェトナム帰還兵の話やPTSDで途方もない苦しみ^{くるしみ}に苛まれ、人生が凍り付いてしまった退役軍人の話を読んで、『イーリアス』で描かれる奇烈な怒りと復讐行為^{ふしゅうぎこう}や、ギリシア悲劇で描かれる英雄たちの苦しみは、詩的誇張ではなく、むしろ、普通には語りえない、語ることでできない事々^{ことごと}を、物語や詩の力で何とか捉えようとする営みだっ

たのではないか、と思うようになった。ギリシアの男たちは通常兵役が課されているから、イーリアスを聞いていた人々の多く、ギリシア劇を見ていた市民たちの多くは、戦争を知っていたはずだ——そう思いながら読み進めていくと、第五部20章「自分の声を見つける——リズムの共有と演劇」で、まさにギリシア悲劇が登場した。ブライアン・ドーリーズという演出家が、二〇〇八年にサンディエゴで海兵隊員たちに向けて『アイアース』の朗読会を行った。これは大きな反響を得たそうで、この企画はその後アメリカ国内外で二〇〇回を超える上演に発展し、戦争帰還兵たちの窮状を人に伝え、彼らの家族や友人たちに対話と理解を促したという。

この演出家ドーリーズによる本、*The Theatre of War: What Ancient Greek Tragedies Can Teach Us Today*を最近読み始めた。彼は大学で西洋古

典を学んだ人で、非常に難しい病気に罹^{かか}った恋人を失った後、ギリシア悲劇に慰めを見いだしていた（彼の言葉を借りるなら、「ギリシア悲劇が語り掛けてきた」）。また、彼が自分の家族との複雑な問題を受け止めるのに、ギリシア悲劇をガイドラインのように用いているのを冒頭で読むことができる。

ドーリーズが言うには、「死に触れた人たち、人間性の最も暗い側面に直面した人たち、愛しそして愛する者を失った人たち、そして犠牲というものがどういふものかを知っている人たちは、ギリシア劇を難なく理解できる。これは彼らの物語なのだ」。また、先に挙げた本の著者、トラウマの臨床と研究の専門家に言わせれば、『アイアース』は「トラウマ性ストレスの典型的な記述」なのだという。

ギリシア悲劇には、死んだり、殺されたり、殺したり、殺された者の復讐をしたりする人々を取り巻くドラマが渦巻いている。しかし、原則的に舞台上で直接人が死ぬ瞬間は演じられない——ということになっている。唯一の例外として挙げられるのが、ソポクレースの『アイアース』である。ギリシア人なら誰でも知っている（はずの）勇猛アイアース、大きな体躯^{たぐ}の偉丈夫、アキレウスに次ぐトロイア戦争の大英雄

アイアースが、舞台上で自殺をするというショッキングなシーンが劇の中盤にあり、後半は彼の遺体の処遇をめぐるドラマとなる。

悲劇『アイアース』を初めて読んだとき、正直に言って私はこの物語を受け止め切れなかった。アイアースの怒りも、恥も、狂気も、苦しみも、神話のヴェールによって私から隔てられていた。アンティゴネーやエレクトラーのように「直接私に語りかけている」、とは感じられなかった。

さて、悲劇『アイアース』が、深いトラウマを負った海兵隊員たちと、その家族、親しい人の胸に深く染み入り、彼らへ理解と会話を促した……という報告、そしてトラウマとPTSDとギリシア悲劇についていくらか読んだあとで、再び『アイアース』に挑んでみる。すると、冒頭のアテーナーとオデュッセウスの会話から、驚くほど心に染み入った。アイアースの苦しみを軽やかに見下ろす女神と、敵対していたにもかかわらずアイアースの苦しみに寄り添うようなオデュッセウスの会話に、なぜか涙があふれた。

深く傷付き、人が変わってしまったような行動は、本人のみならず、周囲の親しい人々をも苦しめる。アイアースの愛妾テクメーッサの台詞が悲しい。

「あの恐ろしくもたましいアイアースさ
まが、心狂わす病の嵐にうたれ、いまは倒
れておしまいになりました」

（二〇五—七行）

テクメーッサはこれが「病」だと分かっている。でもどうすることもできない。アイアース自身にも、どうすることもできない。彼の、テクメーッサへ向けた「女よ、沈黙は女たちを美しくする」という言葉や、自分の息子を抱き寄せて言う、「この生々しい血の跡を見たとして、この子はこわがるようなことはない筈だ。もし本当にこの父の血を受けた子であるならば」という台詞^{せうご}から、アイアースは昔ながらの神話的な倫理観、英雄性、男らしさの美德のようなものにのっとっているのが分かる。この「英雄らしさ／男らしさ」がより一層アイアースを苦しめ、がんじがらめにし、回復から遠ざけているようにも感じられる。

一瞬、生への希望を見いだしたかのように周囲の人々に思わせてから、アイアースが自害する、という展開も妙に生々しくリアルだ。アイアースの亡骸^{なきがら}を中心に諍^{いさか}合うテウクロスとメネラーオスのやりとりも、遺体を踏みにじろうとするアガ멤ノンの姿も、死者を辱めるべきではないと主張するオデュッセウスの様子も、

すべてが切々と胸に迫る。残された人々の戸惑いと悲しみが、ひたひたと体を包んでいく。

ふと、この作品においてアイアースは、どうしても舞台上で死ぬ必要があったのだ、と直感した。人々に見える形で命を絶ち、そして、その遺体の人々の目に触れ、残された者たちにより議論され、大切にされる必要があった。そのことによって、現実の死、残虐行為、喪失によって深く苦しみ傷ついている人々が「自分の言葉」や「自分の体」を再発見し、再統合する——大仰に言っているなら「生まれ変わる」——機会になったのかもしれない。

これはただの直感なので、これから

実際に検証し、

調べ、考え

ていく必

要がある。



「私が皇帝になって世界を平和にする！」

西洋中世唯一の女性歴史家

ビザンツ皇女アンナ・コムネナの

数奇な運命を鮮やかに描く！

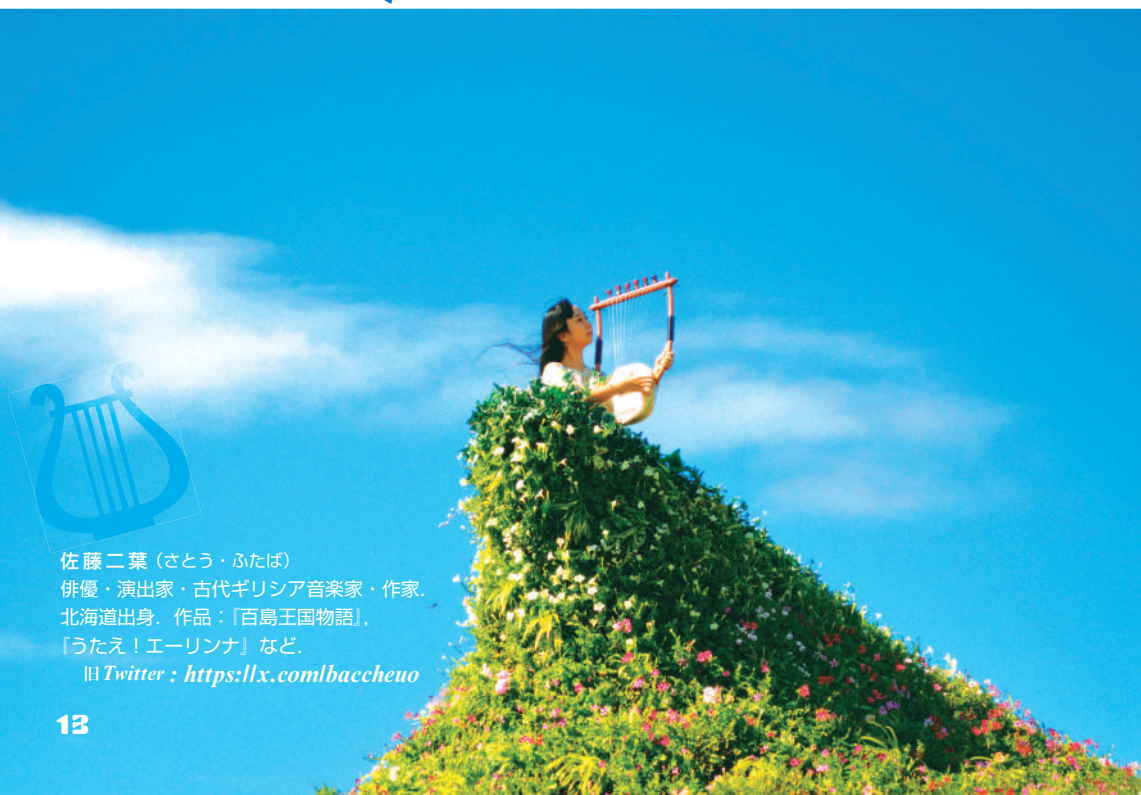
シリーズ第五巻、リリース！

◎佐藤二葉の最新刊
『アンナ・コムネナ ⑤』
星海社 COMICS,
B6, 128 ページ

しかし、私にとってこの作品のアイアースは、もはや神話のヴェールの向こう側の人ではなくなった。

世界への解像度が上がるたびに、ギリシア悲劇はより色鮮やかに見えるようになる。

アイアース、そして彼に慰撫されたであろう古代ギリシアの傷ついた人々が、くつきりと姿を見せ、私に語り掛け始めた。



佐藤二葉（さとう・ふたば）

俳優・演出家・古代ギリシア音楽家・作家。

北海道出身。作品：『百島王国物語』、

『うたえ！エーリンナ』など。

旧 Twitter : <https://x.com/baccheuo>

詩人 水原昇 前編

ムネーモシユネーの会・主宰 みむらりえ

前口上

「最終回」だとか「やめる」とか「筆を折る」とか言いながら、凝りもせず、結局今号のために原稿用紙に向かっている。

これではオオカミ少年ならぬオオカミおばさんなわけで、そんな自分のため息が出る。

しかしながら、それでセンセイが喜んでくれるなら………ん？

喜んでくれるのだろうか？

今までの原稿を読み返してみると、センセイの怖い顔が目につくが、センセイの怒った声が聞こえてくる。

……まあね。センセイに怒られるのは慣れて

いるので、得意のケ・セラ・セラの精神で、遠い記憶を手繰り寄せてみよう。

※ ※ ※

編集隊長からは、「今号のお題は『水原昇』で」

……という指令が届いている。

水原昇……

難しいお題だなあ……

水原昇にたどり着くかどうか分からないけれど、ウォーミングアップ代わりに、思い出した

ことから少しずつ記していこう。

センセイは食べることが大好きな人だったことは以前にも書いた。だからセンセイに食の好き嫌いはなかったように思う。そしてどのような料理が出てきても必ず「おいしい」と言って召し上がっていた。

私の観察したところでは、とてもおいしい料理のときは、何度も「おいしい」とのたまひ、一般に人が不味いと思うようなお料理のときでも、一度は必ず「おいしい」とのたもうた。

恐らく「おいしい」とセンセイがおっしゃるのは、作った人への敬意の表れなのだ。

そんなセンセイが「おいしい」と言わなかったのは、入院中の病院食に対してだけだった。苦しい闘病生活だったから致し方ない。

私はというと、あまり食に対する欲がなく、出されれば食べるが、あえて食べようとは思わない食材が多い。これを「好き嫌いがある」ないしは「偏食」と世の中では言うらしい。

それはともかく、あるときセンセイに「君は、好き嫌いはありますか?」と尋ねられたことがあった。

「〇〇はだめです。××もだめです……」と好んでは食べない食材を列挙し、最後に「クルミもだめです」と答えると、センセイは大真面目な顔で「それじゃあ、立派なリスにはなれないな」とポツリとおっしゃった。

「え! 立派なリスですか?」

と心の中で思わず叫んだけれど、それがセンセイの冗談なのか、本気で私に立派なリスになつてほしかったのかは不明である。

講談社現代新書に『美について』というセンセイの書物がある。

装丁が変わってしまったので、今はどうか知らないが、初版のカバーの「表四」部分にはセンセイの若い頃の写真が載っていたが、その写真のセンセイは眼鏡をかけている。

晩年のセンセイを知る人なら、センセイと眼鏡が結びつかない人もいるかもしれない。近視だったのか乱視だったのか、あるいはその両方

だったのか詳しいことは訊いたことがないのでわからないが、視力はそれほど良くなかったと思う。

けれど眼鏡はかけていなかった。

いつだったか「僕にちょうど合う眼鏡がなくてね。本当は眼鏡をかけた方が良いでしょうけど、かけるのはやめたんだよ」とおっしゃっていた。

私も老眼鏡のお世話になる年頃となったおかげで、合う眼鏡がないとおっしゃった意味がわかるようになった。

センセイはもちろん老眼鏡は持っていらないし、使っていらない。講義や講演のときなども資料を見るために老眼鏡は用意していらないが、ついつい話に熱が入って、かけるのを忘れることが多かった。



それで、老眼鏡なしで岩波文庫などを朗読するのだから、聴いていた人々は、

「今道先生は目が良いんですね。あのお年で老眼鏡なしでお読みになれるのですね」と驚愕して

いた。

しかし、よくよく考えてみると、センセイは、老眼鏡なしで小さな文字を読んでいたのではなく、はやける文字を記憶を頼りに読んでいたのではないだろうか。

あながちこの推測は的外れではないように思う。というのも、センセイの記憶力は人並み外れてすごいのだ。

たとえば、センセイは、島崎藤村の『晩春の別離』が好きだったが、これは正確な行数を数えようとして途中でわからなくなってしまうほど長い詩だ。一〇〇行を超えるのは間違いない。センセイが中学生か高校生の頃に、国語の先生が「このクラスには島崎藤村の『晩春の別離』を暗唱できるものはいないだろう」と言ったそうだが、その気持ちはわからなくもない。

しかし、我々が今道少年は、その先生の言葉を受けて、すつくと立ち上がり、

時は暮れ行く春よりぞ
また短きはなかるらむ
恨は友の別れより
さらに長きはなかるらむ

……

と朗々と全編を暗唱してみせて、国語の先生を驚かせたという話を聞いたことがある。

しかもその記憶は、八〇歳を過ぎても色褪せず、センセイが『晩春の別離』をすらすらと暗唱するのを何度か聞いたことがある。

センセイの頭の中はどうなっているのだろうか。覚えた詩が常に記憶の表層にあるというのではないようで、何かのきっかけで、記憶に刻み込まれた詩や文章が表層部にくつきりと現れるようなのだ。

センセイは、長い間『刀水譚』という自作の小説の原稿を探していらした。

センセイの書斎は、編集隊長はご存じだが、紙の山……思い出すとめまいを起こすので、詳しい説明は省くが、とにかく原稿はほとんど紙の山の中に埋もれていってしまうのだ。埋もれたら最後、発掘できれば良いけれど、そのまま化石になってしまうこともある。

ある日センセイら「出かけるので、その間に書斎で原稿を探してほしい」と頼まれたことがあった。

何の原稿だったか忘れたが、とにかく紙の山をかき分けかき分け探していたら、結局当の原稿は見つからなかったが、何と偶然『刀水譚』のコピーを発見！

これがセンセイの処女小説かあ、と感慨深く変色したコピーを眺めているうちに、ふとセン

セイを驚かせよう、と思いついた。

センセイは、この小説に気づくだろうかと、少しワクワクしながら、外出から戻られセンセイの前で、私は説明なしに、『刀水譚』の冒頭を音読してみたのだ。

かりそめの一人旅の道すがら、下総は根本の郷に今は微かな昔語りを伝え聞き、折からの夕陽にあわれは深く、想い湧くままに草し終わった一篇の譚詩である。常陸風土記・利根川図志の二巻を参照したけれども地理・歴史上の正確は必ずしも果たしていない。

最初は少しキョトンとしていらしたセンセイであったが、徐々に私の音読が何を意味するか理解すると、まさにアルキメデスが「ヘウレーカ！」と叫んだ瞬間のように、急に目が輝きだすと同時に、すべての文字がセンセイの頭の中によみがえったのだ。

センセイは私の音読を遮り、自ら

朝な朝な霜に凍えひねもすの朔風（さくふう）に晒されては萩も花散り葛葉も萎えた晩秋の夕暮れ、大利根の川霧は雲のように流れ、その彼方幻のような雑木林の上に月は光芒を内に包んで匂うがごとくたゆとうていた。月

はきれいだ。……

と空で続きを朗唱された。

センセイを驚かせるつもりが、不覚にも私の方が驚いてしまった。自作とはいえ、高校生の頃に書いた小説を、冒頭部分だけとはいえ、八〇歳を超えたセンセイが、一言一句間違えずに暗唱できるとは。

もう一つ同じような経験がある。……もう時効だからここに書いてもいいかな。……

葉祥明氏の挿絵の入った『雲のゆくおるがん』というセンセイの詩集が上梓されたときのこと。そのときセンセイは、何度目かの入院を経て、ご自宅に戻っていらした。若い頃に書きためていた膨大な詩の中から、いくつかを厳選して収めた詩集である。

葉先生の絵がとても美しく、センセイの詩を引き立てているこの詩集ができあがったときは、闘病中のセンセイに代わって校正したこともあり、センセイへの何よりもの贈り物になったと、私の喜びもひとしおであった。

センセイも美しい詩集を手にとってご機嫌の様子であったが、「おや？ これは一文字違うんじゃないかね」とおっしゃった。「これは『○○』ではなく『△△』のはずだけれど……」

とセンセイの静かな声が私の耳に入ってきた。
「え?! 違う? そんなはずは……」
と慌てて原稿を取り出して照合してみた。

確かに違う。

一文字読み違えている……。

まさに晴天の霹靂^{（きれき）}。

雷に打たれて私はしばし言葉を失った。

地にめり込みそうなくらい気分が落ち込んだ。
あまりに私の落ち込みが激しく、センセイも
可哀想に思ったのか、「誤字脱字は君のアイデ
ンティティだからいいじゃないか。君らしい」
と言って笑ってくださいました。

こんな愚かな過ちは口が裂けても言えない。
なので以来、どこが間違っているかは、セン
セイと私の二人だけの秘密となり、やがては永
遠の謎となるであろう。



『雲のゆくおるがん』 詩・今道友信、
絵・葉祥明、かまくら春秋社、2012年。
北鎌倉葉祥明美術館のホームページ
<https://www.yohshomei.com/>

さて、センセイは、先の『雲のゆくおるがん』
に取められている詩をはじめ、多くの詩を書き
残しているが、そのほとんどを当初は「水原昇」
というペンネームで発表していた。

……やっと今回のお題の「水原昇」にたどり
着いた。無理矢理感はないが、ま、いっか。
東大の教授時代に、「水原昇」の名でハード
カバーの立派な詩集を出版していたと思う。そ
の後、その中から気に入ったものを抜粋して、
いわゆる「豆本」サイズで何種類か詩集を作っ
て、気に入った人々に配っていたようである。

私も「豆本」を頂戴した。

センセイのお仕事の手伝いをした後、慰労を
兼ねて夕飯をご馳走になったときのこと。
とあるレストランの一隅であったが、食事の
後のコーヒーを待っているときに、センセイが
掌にすっぽり入る豆本をテーブルの上に立てて、
「君はこの詩人を知っていますか?」と尋ね
られた。

豆本だから背文字を読み取るのに骨が折れた
が「水原昇」と記されていた。「勉強不足で、存
じません。申し訳ございません」と、その頃は
まだネコを数匹被っていたので、丁寧に返答し
た。

そこでセンセイは、少しニヤツとして、「こ
の本をあげるから読んでみなさい」と、その小

さな詩集をくださった。これが私と水原昇の出
会いであった。

このときセンセイが「ニヤツと」された意味
が私にはわからなかったのだ。センセイのペン
ネームが水原昇だったとは……今思い出しても
悔しいが……

※ ※ ※

気がつけば、水原昇の話は結局できないまま
紙面が尽きてしまった。

とりとめのない思い出話にお付き合いいただ
き、ありがとうございます。

水原昇の話は、次号につづく。



一瞬と一生、そして永遠の時

文・茅野友子

「すべての人に平等に与えられているものは何だと思うか？」

中学生になった私に、父がある日、突然こんな質問をしてきた。半世紀以上昔のことである。すべての人に平等なものなんて、一体あるだろうか？ 一人一人みんな違っている。顔も性格も能力も違っているし、家庭も経済事情も違う。健康な人もいれば、病気がちな人もいる。長生きの人もいれば、早死にする人もいる。結局、皆が平等に与えられているものは「死」という運命だけではないのか。

すると父は言った。

「それは『時』だよ。」

私には分からなかった。一日は24時間、一時間は60分、一分は60秒。生きている我々はその時を共有している。でも何十年も生きる人もいれば、生まれて数秒で命を終える人もいる。平等とはほど遠いのではないのか。

しかし、時が過去、現在、未来とつながる連続体であるとするれば、そのもっとも小さい時の

単位は一瞬。時は一瞬の連続なのだ。この世に生を受けた者は、皆等しく一瞬の時を与えられているということになる。

父の答えの意図がやっと分かるような気分になったのは、つい最近のこと。一瞬こそ誰もが平等に与えられている大事な「時」なのだ。その連続が長くても短くても、生で始まり死でおわる人の「時」を、旧約聖書の一作品を手掛かりに考えてみよう。

すべてのことには定まった時期があり、
天の下のすべての営みに時がある。

生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。^{※1}

旧約聖書の知恵文学の一つ、「伝道者の書」

(あるいは「コヘレトの言葉」)は、人の一生をこのように簡潔に歌っている。我々は、自分が誕生した時のことは覚えていないし、死ぬときも

おそらく意識できないまま消えていくのだろう。誕生から死までの人の一生の時に、どんな意味

があるのか、あるいは何の意味もないのだろうか。

たった12章、15ページという短い書ではあるけれど、ここには「時」に正面から取り組んだ詩人の驚くべき思考が読み取れる。この書は次のように始まる。

空の空。伝道者は言う。

空の空。すべては空。

日の下で、どんなに労苦しても、
それが人に何の益になるだろうか。^{※2}

恐ろしい言葉ではないか。虚無の究極とも取れるこの表現に、惹かれる現代人が多いのも、この書が旧約聖書の中で高い人気を誇っているのも理解できよう。紀元前2世紀の半ばに書かれたということだが、その言葉は時代を飛び越えて、我々の心に突き刺さる。

まず「空」という言葉である。これだけでもインパクトが強いのに、「空の空」とは絶対的

※1 旧約聖書「伝道者の書」第3章、新日本聖書刊行会、新改訳二〇一七

※2 「伝道者の書」1・2・3

「空」を表すのだ。この表現はヘブライ語では最上級を表すものだという。「王の王」が「王の中の王、最高級の王」を表すように。その上「空しい」という言葉は、全部で38回も繰り返し返されているとのこと。魅力的だが掴みにくいこの書を、自分の感覚を頼りに読んでみたい。

この世のすべてが「空」であるとしたら、作者は何を我々に伝えようとしているのだろうか。このような書を残すことも「空」ではないのか。作者については、この書の第一行に「エルサレムの王、ダビデの子、伝道者のことば」と書かれている。

しかし、それも事実ではなさそうだ。ダビデ王が建設したイスラエル王国を、息子ソロモンが継承し統治していたのは紀元前10世紀頃である。この書が執筆されたのは紀元前2世紀の半ばとされているから、時代が合わない。作者をソロモンとは書かず、しかしソロモン王へと読み手を誘導する筆者の作為は何だったのか。

作者といっても一人ではなく、複数の編集者が加筆編集して今の形にたどり着いたとも考えられる。しかし、それでもこの書にははつきりとした個性があり、強烈な筆力は我々をとりこにする。ここには伝統的なユダヤ教の教えとは相いれないと思われる革命的な表現が、次から次へと繰り広げられるからだ。

※3 小友聡著「コヘレトの言葉を読む」10ページ、日本キリスト教出版局、二〇一九参照。

さて、伝道者とは何者か。この語はヘブライ語の「コーヘレト」の訳で、原義は「集会者」を意味しているという。ユダヤ教の教師、指導者として尊敬され、集会などを執り行う立場にあった人物であろう。現代の牧師とか教師、講演者などがそれにあたるだろう^{※4}。

彼は八〇〇年も昔の「王の王」ソロモンの名を借りてこの書を記したのだ。それも、「ソロモンの知恵」また「ソロモンの栄華」と後世にもてはやされた彼の名を示唆しつつ、すべては空しく、知恵も栄華も何の益にもならないと宣言するのである。そして「空の空、すべては空しい」と第1章から書き始め、最後の章を同じ言葉で締めくくる。「空の空。伝道者は言う。すべては空」(12:8)。それ以下は編集者の加筆とされている。

「日の下には新しいものは一つもない」(1:9)と言いつつも、終始「空の空」と一貫して伝道者が主張している「空」とは、どんなものか。単なる「むなしさ」とか「虚無」ではなさそうである。「空」と訳された語は原典のヘブライ語ではヘベル(hebel)であり、「その大もとの意味は「息」または「蒸気」であるようだ。それは常に何か実体のない、束の間に消える、ある意味では無駄なものを指している」。また「ヘベル」とは「時間的な」「短さ」「言い換えると

※4 日本語訳聖書のタイトルも「伝道の書」、「伝道者の書」、「コヘレトの言葉」と3種類はある。

『はかなさ』とか『つかの間』『瞬間』という意味であって、それは人間に与えられている生の時間を表現しているとも考えられる」(小友、前出、二二〇ページ)。

「息」とは、風や蒸気と同じように見えないから頼りないようでありながら、生死を分かっているに、命の唯一の証しとなる。いまわの時という表現があるが、その一瞬ほど生の時がいかにはかなく貴いものか到我々は気付くのではない。この世の営みはすべてはかないが、それゆえに与えられている一瞬一瞬は貴い。伝道者の意図はそこにありそうだ。

そのような「空」の理解のうえで、伝道者はこの世の重要事項を一つ一つ点検していく。

まず知恵である。「伝道者である私は、エルサレムでイスラエルの王であった。」と再びソロモン王の仮面を強調したうえで、彼は次のように結論する。

私は、天の下で行われるいっさいの事について、知恵を用いて、一心に尋ね、探り出そうとした。……一心に知恵と知識を、狂気と愚かさを知ろうとした。それもまた風を追うようなものであることを知った。

次に伝道者は快樂を調べる。

※4 R・デヴィッドソン著、牧野留美子訳「伝道の書雅歌」28ページ、新教出版社、一九九六年。

私は心の中で言った。「さあ、快楽を味わってみるがよい。楽しんでみるがよい。」

しかし、これもまた、なんとむなしなことか。笑いか。ばからしいことだ。快楽か。それがいったい何になるう。

彼は、心は知恵によって導かれ、体はぶどう酒で元氣付けようと考え、事業を拡張した。邸宅を建て、ぶどう畑を設け、庭と園を造り、そこにあらゆる種類の果樹を植え、池も造った。

男女の奴隷、牛や羊、金銀宝石も増やし、側妻も手に入れた。しかし、結果は同じ、すべては空しいのみであった。

伝道者は次に人の労苦と病を見た。裁きの場に不正があり、正義の場に不正があるのを見た。しかし、人も獣も結末は同じ、「みな同じ所に行く。すべてのものはちりから出て、すべてのものはちりに帰る」(3:20)。

これでは人は生まれなかつたほうが幸いではないか。すると、伝道者はそれを見越してこう宣言するのだ。

私は、まだいのちがあつて生きながらえている人よりは、すでに死んだ死人のほうに祝いを申し述べる。また、この両者よりもっと良いのは、今までに存在しなかつた者、日の下で行われる悪いわざを見なかつ

た者だ(4:2~3)。

知恵に恵まれ、栄華の限りをこの世で尽くしたソロモン王の言葉としては、ただ驚くばかりの暗さであり、皮肉な結論だが、作者の伝道者にはよく分かっている。

ソロモンの死後、あの絢爛豪華な王国がたどった道を、非情な歴史は教えてくれているし、だからこそ、伝道者はソロモンを作者に擬したとも考えられる。

人の一生は生に始まり、死によって終結する。ここには死後の世界へと我々人間を誘う慰めの思想はない。生と死には挟まれた時は、神から与えられた時。死後の世界を仮定しないから、一層この世の時が貴重になる。「一瞬一瞬を十分に楽しめ」と伝道者は言う。刹那主義とは違う、虚無と楽観を超越した世界を示唆しているかのようだ。

死が突然訪れたとき、命の絆は断ち切られる。一六二一年に刊行された英国王ジェームズ一世の欽定訳聖書では、我々の命は「シルバー・コード(silver cord)」でつながっているらしい。日本語訳では「銀のひも」あるいは「白銀の糸」と訳されている。

これらの訳語が原典のヘブライ語の直訳かどうか分からないが、この書の最終章には、人生

の終わりを厳しくも美しく歌い上げた箇所がある(12:1~7参照)。伝道者はまた卓越した詩人でもあった。

若さと老い。

人の一生をこの二幕と捉える伝道者は最後に命じる。「汝の若き日に、汝の創造主を覚えよ。命のきずなが断ち切られる前に」と。

どのような考えを持つにせよ、この旧約聖書の作者は、我々に時の大事さを改めて自覚させてくれる。

私たちのよわいは七十年。健やかであつても八十年。

そのほとんどは労苦と災いです。

瞬く間に時は過ぎ、私たちは飛びざります。

(詩篇90:10)

飛び去った我々はどうなるのか。

永遠というコンセプトが、はるか遠くの空から雲のように浮かび上がってくるかもしれないが、これは次のテーマである。

茅野友子(ちの・ともこ)

国際基督教大学大学院修士課程修了。カリフォルニア大学アーバイン校英・比較文学科博士課程修了。博士(英文学)。元姫路獨協大学教授。1997年、カリフォルニア大学アーバイン校学長賞受賞。

●著書『シェイクスピアの時と我々の時』、『仕える婦人達——忍耐の伝統とグリセルダ伝説』ほか。

●編著『バストラル——牧歌の源流と展開——』、『古代ギリシアの女性像——女神から娼婦まで——』。

行間読んで、進んだ先に

「文章で明示してはいないが、そう感じとって欲しい」という
文芸としては高度であっても、ビジネスにおいては最低なもの。
それが行間です……

文・イラスト
たぬ屋



そんなややこしい「行間」の存在を、我々は国語の授業でしれっと教えられてきました。

作者の意図を読み解こうとする場合、行間を読む力は必要です。

が、よく考えると、意図を行間に隠すなんて底意地の悪いことをした結果、思いが伝わらなかったのなら、それは作者側の問題ではないのか。

そんな教育を受け、大人となった私は、時に深読みしたり、勘ぐったり、性格が悪くなる方向にばかり、その力を発揮するのです……

先のマンガで住宅街にあった看板内の漢字「狹路」。これは、音読みで「きょうろ」と読みたくなりますが、そんな言葉はありません。訓読みで「せばじ」と読むのが正しいようです。

「^{あひろ}狹路」は「狹路」と同じものを指しますが、これにはいわゆる「ボトルネック」の意味もあります。

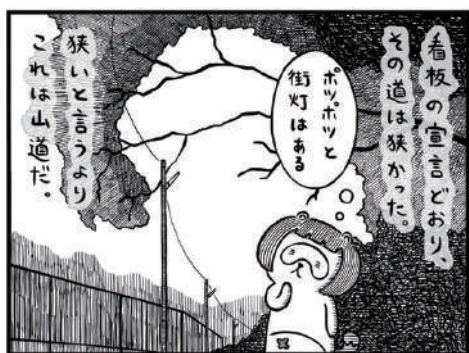
このようないかにも日本語らしいややこしさ、変な教育の賜物か、私はちょっと好きなのですが……

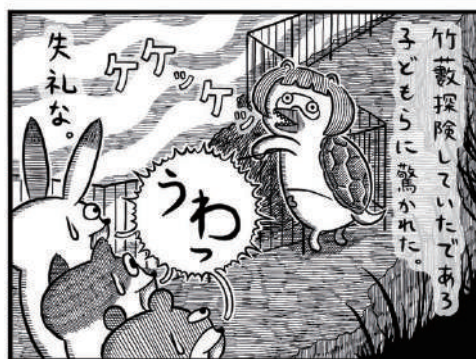


さて、日本語への愛憎はほどほどに、住宅街の片隅で「狹路のため車両の通り抜けはできない」と訴える看板の行間を読み、徒歩なら大丈夫だろうと、私はその道に足を踏み入れたのでした……

この辺りは小山が連なる起伏の多い地形をしているのですが、そこに張り付くように住宅街が形成されています。私が歩く隘路は、そんな山の上下に広がる住宅街を結ぶ近道。通常ルートであれば、山をぐるっと回り込むことになるため、上までは五〇〇メートルの道のり。

しかし、ここを通れば半分以下、最短距離の二〇メートルでアクセスできるのです。ただし……





しゅっ……

——行間読んで、進んだ先に……おしまい

● ● ● ● ● ● ● ●



竹藪たけやぶを探検して遊ぶなんて、近頃の子どもらにしては、なかなかの強者。

ならば甘んじて、そして、礼儀として不気味な存在を演じてみせよう……

ため池を静かに、意味ありげに見つめる不審者を。

たった二〇メートルでしたが、街の喧騒けんそうから遠ざかることのできるいい道でした。

日常の中で行間を読むことに疲れ、イヤな大人であることを自覚してしまったり、また、この道に逃げ込むことに



ため屋

<https://tanuya.blog.jp/>

Twitter: @tanuyamatanya



第八回 講座アワーハウス

ファームウェア

スタジオアワーハウス代表

ヤナギダ・カツミ

私が、古いコンピューターをぞんざいに扱わない理由

コンピューターは人間とよく似ている、というより脳の作りを参考をしているので、ファームウェアも人間に例えると説明しやすいでしょう。

私たち人間は、心と体だけで出来ているように見えますが、実は第三の存在、ファームウェアがあるのです。

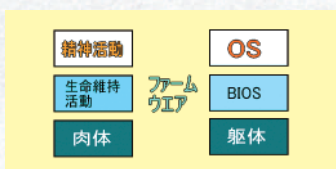
いわゆるウィンドウズやマックOSというプログラムは、人間でいえば意識や心です。そしていろいろな電子部品や回路の基板や外装ケースは身体に相当します。

しかし意識や心では、心臓を動かして丁度いい血液を流したり、寝ている間に息をしたり、肝臓でアルコールを分解したりできません。

同様に、ウィンドウズやマックOSなどのOSでは、電源を立ち上げ、部品全体に丁度いい電流を流したりすることができないのです。

そこでこのような基礎的なことをやってくれるのがファームウェアで、コンピューターならバイオス(BIOS)というプログラム、人間なら自律神経や副交感神経のようなものになります。

ですからファームウェア、つまりバイオスまでしか立ち上がっていないコンピューターというのは、生きてはいるものの意識不明でベッドに横たわっている人間のようなものです。



ファームウェアもプログラムで、意識とは別にやるべきことをこなしているのため、舞台上に上がる前、心がホットになって心臓がドキドキするのは、意識ではなかなか止

められません。

複雑な仕事をコンピューターにやらせ、CPUがホットになったとき、ファンのスピードを上げるのも、ファームウェアの関係するところで、OSからは変更できません。

ファームウェアについて人間とコンピューターに違いがあるとすれば、人間はそれなりの修行を積むことによって、ある程度自律神経をカイゼンできるという点でしょうか。



しかしそのうちコンピューターも、AIが自分の都合の良いように、自分のバイオスを最適化するでしょう。そのとき人間をジャマな存在と思わなければよいのですが。

そのためにも私は古いコンピューターをぞんざいに扱わず、「よくもご先祖様を虐げおって」などとAIに後ろ指さされぬよう、気を付けているのです。

また近年では、脳だけでなく臓器にもファームウェアがあり、それがネットワーク化されていることも分かってきました。これはコンピューターが、既にやっていたことです。



AIは正當な学習によって発達するものと考えられています。人間のひらめきや遺伝子の良質なエラーのように、例えば結論に至るアルゴリズムで、想定していなかったエラーが思いのほか優れていたりして、ブレイクスルーを作るかもしれません。

つまりAIには生命体同様、突然変異による進化論が適用されるかもしれないと、考えられるわけです。

生物の条件である自己複製機能では原材料調達のための自動運

転システムなど、その準備は着々と人間が進めて、あるいはAIに進めさせられています。

ところで精神に亡霊があるのなら、ファームウェアの亡霊はどうなってしまうのでしょうか。優れた作家や霊能者の先生方も、この辺りの対応を忘れないで欲しいのですが。

というのも、生き物が死んだとき、意識はもちろん、肉体から離脱したように見えますが、同時にファームウェアも離脱したように見えるからで、離脱したファームウェアについてのことも、上手に語って欲しいのです。



「わが哲学を語る」を語り継ぐために

偽物——その名に値しないもの

文・伊藤博章

日本美容専門学校講師

序

本物と偽物の問題に関わる視点から今道の思想を語ることが求められたのだが、何を語ればよいのか。

偽物の問題は、美学者であり古典文献に精通する今道であるから、贋作がんさくや偽文書の問題を論じていてもよさそうだが、思い当ることがない。芸術体験におけるオリジナルと複製の問題をどこかで論じていたのかもしれないが、分らない。求めに応じて書くことができず、今道が「偽物」という言葉を用いて発言したことがあるので、それについて述べることにした。

その名に値しないもの

既に「フィヨカル」誌上において言及したことが、今道は「信仰に至らない哲学は偽物だと思う」と語った(本誌11号)。この「偽物」は「本物ではないもの」を意味する。「本物」には「今年の冬は本物だ」と言うように「その名に

値する本物のこと・本格的であること」という

意味があり、「偽物」は「その名に値しないもの・本格的でないもの」の意味を持つ。例えば「彼の料理人としての技は偽物だ」と言うことができる。技が本格的ではない、「プロの料理人の技」という名に値しないという意味になる。プロの料理人の技ではないのに「料理人の技」と言うのは「偽り」であるという意味であろう。

今道はこのような意味合いで「偽物だ」と言っている。つまり「信仰に至らない哲学は偽物だ」という表現は、「信仰に至らない哲学は、哲学の名に値しない哲学である」を意味するだろう。

おそらくは今道はここでは「哲学」を「自分の哲学」の意味で用いている。今道は自分の主著である「同一性の自己塑性」を「キリスト教哲学の本」であると言っていた。したがって今道の「自分の哲学」とは「キリスト教哲学」である。つまり「信仰に至らないキリスト教哲学は

その名に値しない」ということだ。

許されないもの

今道にとって「偽物」は「許されないもの」である。「偽物だと思ふ」とは「許されないものだと思ふ」の意味であり、そこには「自分の哲学的思索が信仰に至らないことを許さない」という意味合いが含意されているのであろう。

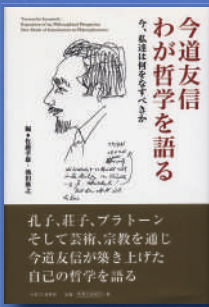
哲学者として今道は「その名(概念)に値すること」を大切にしていた。今道は新しい学問を創出した。そして、その学問の実質にふさわしい「名」を自ら考え「カロノロジア」や「エコエティカ」と呼び、その名に値する学問の構築に動しんだ。また実質にふさわしくない名(概念)を用いることを許容しなかった。「その名に値しないもの・偽物」の存在を認めなかった。

例えば、動物が発する音声を「言語」という名で呼ぶことを認めず、厳格に区別し、「音声的記号」と呼んだ。「動物の言語」という「偽物」

を許さなかった。

今道自身が語ったことであるが、今道が知人の動物学者の研究室を訪れたとき、その学者は慌てて机の上にある雑誌を隠したという。今道がなぜ隠したのかを尋ねると、その冊子の表紙には「動物の言語」という表記があり、それを今道が見たらまずい、と思ったからだという。

大規模言語モデル（LLM）の自然言語処理は文脈を理解しているように思えるため、その自然言語処理が安易に「理解」と呼ばれている。「偽物」に関する今道の思想は語れないが、今道の哲学がその様な「偽物」を許すとは思えない。



『今道友信 わが哲学を語る』
（今道友信 著、佐藤孝雄・池田雅之 編、かまくら春秋社、2010年）

今道友信（いまみちとものぶ） 東京大学名誉教授、清泉女子大学名誉博士、国際形而上学会会長、国際美学会終身委員・名誉会長、日本アスペン研究所特別顧問、日本美容専門学校名誉校長。

◎略歴

1922年－2012年。東京生まれ、東京大学文学部哲学科卒業、バリ大学（研究員）、ウェルツブルク大学非常勤講師、九州大学助教授、東京大学助教授、教授、国際美学会副会長、哲学美学比較研究国際センター所長、紫綬褒章受賞、放送大学教授、清泉女子大学教授、副学長、勲三等旭日中綬章受賞、第25回マルコ・ポーロ賞受賞、2006年：第19回和辻哲郎文化賞受賞。

PVICIRITYVO'SPLENDOR

第12回

美は輝きだ

編集隊長
演賢

インチキにかこつけて

古典文献学目線ではインチキ学者でも、ポエムを語らせれば、超一流、机上の夢想思想家と言えるのが、みんな大好き超人ニーチェだ。アポロンのなるものとディオニソスのなるものの対立だの相克だのと聞けば、もうそれだけで中二病心がクスぐられずにはお（し）れまい。

この中二病ベクトルの要因として、ニーチェの作品に元々備わる特性はもちろんであるが、重症化（？）に積極的に一役買っているのが、日本語の言い回し、すなわち訳語、訳文である。

作成の秘訣は、さりげなく大げさに、誇張し、情熱的に訳出することである。訳者が鼻息荒くニーチェ以上に舞い上がり、興奮して悦に入ってしまったくらいでちょうどいい、というか、程度の差こそあれ、この傾向は哲学系翻訳書、場合によっては研究論文にさえ感じられる香ばしき昭和伝統芸的修辞スタイルと言えなくもない。

例えば「アポロン性」「アポロンの要素」「アポロンのな」ではイケない。「アポロンのなるもの」でなければ。「これはべんである」ではイケない。

「これこそがまさに一本のペンなるものなのである／にほかならないのだ」とすべきだ。

ある／にほかならないのだ」とすべきだ。



とは言うものの。

「神は死んだ」という超有名な言葉（訳文）は、微妙に不味い。正しくは「神は死んでいる」だ。「死ん（で）」は形容詞である。「死んだ」と訳すと動詞。形容詞の「死んだ」は「死んだ神」とか「死んだ魚」と使うのが筋で、原文は Gott ist tot、英訳も God is dead、と、形容詞（こじつければ名詞）なので冷静な訳文である。

そもそも西洋の神は、古代ギリシャ以来、死なないので、これはポエムな修辞、プラトニズムや神学・教理・教会が機能しなくなった程度に解釈すれば、張り切り過ぎた中二訳「神は死んだああつ！」は、品位なき過熱暴走訳とも言えそうだ。

されどインチキも人の心に響けは流行し、クリエイティブな価値があることは確かである。

- フィロカル 第12号（2024年夏）
- 制作協力 ムネーモシュネーの会
- 編集隊長 演賢（hamacken）
- 発行所 哲学文化塾（今道友信記念文庫）
- 大異山高徳院清浄泉寺
- @iazoya
- 企画編集 ビナケス出版有限公司
- 日美学園日本美容専門学校
- OMNIA VINCIMVS FRVCTV INTER FOLIVM VERO!

シェイクスピアの時と 我々の時

茅野友子 著



イギリス文学の森で深呼吸

シェイクスピアに誘われ、400年の時空を超えて
バーチャル=リアルなエッセイの旅に出よう…

ピナクス出版

定価：本体2,400円（税別）



シェイクスピアの時と我々の時 茅野友子
46判・上製・264頁・縦組 本体2,400円+税
ISBN978-4-903505-20-6 C1090



茅野友子(ちの・ともこ) 国際基督教大学人文科学科卒業。同大学院修士課程修了。カリフォルニア大学アーバイン校英・比較文学科博士課程修了、博士(英文学)。立教女学院、東京女子大学、カリフォルニア大学アーバイン校講師、米ハンティントン図書館研究員を経て、元姫路獨協大学教授。英文学研究(主としてルネサンス期)。比較文学、日英比較研究。1997年、カリフォルニア大学アーバイン校学長賞受賞。
◎著書：『仕える婦人達——忍耐の伝統とグリセルダ伝説』(英文・ミシガン、1989年)、
『国際化時代の日本語』(大学教育出版、2000年)。◎編著：『パストラル——牧歌の源流と展開——』(ピナクス出版、2013年)、『古代ギリシアの女性像—女神から娼婦まで—』(ベディラヴィウム会、1980年)。◎共著：『英文学と聖書をめぐって』(ベディラヴィウム会、1982年)、『ことばから人間を』(昭和堂、1998年)。